令和７年度　櫛形西小学校学校経営方針

（１）学校教育目標

『多様な世界と出会い，対話のできる児童の育成』

生きる力を持つ子ども

『多様な世界を，柔軟にたくましく生き抜くための，
強くしなやかな力を持つ子ども』

柔軟に感じる子ども

今ここに何が必要で何が大切なのか，相手は何を求め何を欲しているのか，それを受け止め感じる子ども。

相互に響き合う子ども

お互いの気持ちを理解し合い，心を通い合せながら，互いに手を取り合って進む子ども。

深く伝える子ども

自分の考えをはっきりと伝え，相手から返ってくる考えと重ね合せ、再構築しながら伝える子ども。

学校教育目標設定の理由

今，子どもたちに必要なことは単なる知識ではない。なぜならば，単なる知識だけならば，記憶するよりもはるかに多くの高度な情報が，瞬間的にそれも簡単に手に入る。このような高度情報化社会にあっては，記憶に頼った知識だけで，あらゆる場面に適切な対応をすることは困難である。

ありとあらゆる世界で，様々な地域のいろいろな考え方や個性を持った人々と，共に生きて行くことが求められる現在社会では，知識と共に様々なツールを臨機応変に駆使してそれを使いこなし，様々な他者と関わりながら，強くかつしなやかに生きて行くことが求められる。

ではそのために何が必要か？それは「本人の主体性」や「意欲や感性」といった，ややもすると観念的とも言われるような「人間性＝心のあり方」に起因する力である。しかし，この人間性＝心のあり方こそが子どもたちのすべての活動の基礎となる。なぜなら，心が行動を引き起こし，行動によって心が進化し，そしてまた行動が変化するというように，心は行動を支える基盤だからである。

そこで本校の学校教育目標は，この心の育成に重点を置く。グローバルな社会に生きるために必要な対話力（今の日本人に最も欠けていると言われる力）の育成をめざし，そのために必要な生きる力（強くしなやかな力）を，「感じる」・「響き合う」・「伝える」ことを通して育成することを目標とする。

櫛形西小学校は全校生徒５３名（令和７年４月現在）の小さな学校である。学区は中山間地に位置し，地域には親子三世代家庭もあり，昔からのしきたりや習慣が残る，言うなれば”田舎の学校“的な側面を色濃く残している。地域間のつながり，老若男女の異年齢間のつながりも強く，学校への協力を惜しまないその環境の中で育つ子どもたちは，基本的に素直で純朴である。

この地に根差した学校であるという特徴を強みとして，地域コミュニティの重要な基点となるべく，家庭や地域と共に手を携えて歩むことが，学校に求められている姿であると言えよう。同時に，この地から将来世界に羽ばたいていくのであろう子どもたちの行く末を見据え，多様な世界と出会い，そこで対話し，困難をも乗り越えることのできる，強くしなやかな心を育成することも，合わせて重要な学校の役割である。

（３）学校経営方針

「教育は何のため？」の問いからすべてが始まる。これには様々な考え方があるが，「子どもたちの幸せのためであり，その子どもたちが将来の子どもたちを幸せにするためであり，このつながりのため」であると考えている。

ではこの“幸せ”とは何だろうか？幸せという言葉そのものが観念的であるため，これにも星の数ほど考え方がある。かのハーバード大学（アメリカ）が，この幸せについての研究を 80 年近く続けてきた。そこから見えてきた幸せの定義は「他者との親密で深い関係性」「人に役立とうとする心性行動特性」だという。国は違えども、この考え方には深く共感する。具体例を挙げると，事業に成功して富と栄誉を得たとしても，スポーツや芸能で世界一になったとしても，研究分野でノーベル賞を受賞したとしても，それが他者との関係の中で得られたものでなければ，またそのことが自分以外の何ものかの役に立っているという実感がなければ，それは他人からの羨みはあるにせよ，自分にとって幸せを感じない空虚なものであるという。

このことから，「教育は幸せのため，幸せは仲間意識と自己有用感によって得られる」。これこそが学校経営方針の根幹となる。そしてこれを実現させるための手立てが「櫛形西小スピリット」である。なぜなら，ESD と SDGs は，その内容から教育の目的である“幸せの追求”に直接的につながる教育だからである。なおかつ，問題発見や課題解決を，他者との協働・対話によって乗り越えるこれらの教育は，これからの時代に生かせる力の習得に欠かせない教育でもある。

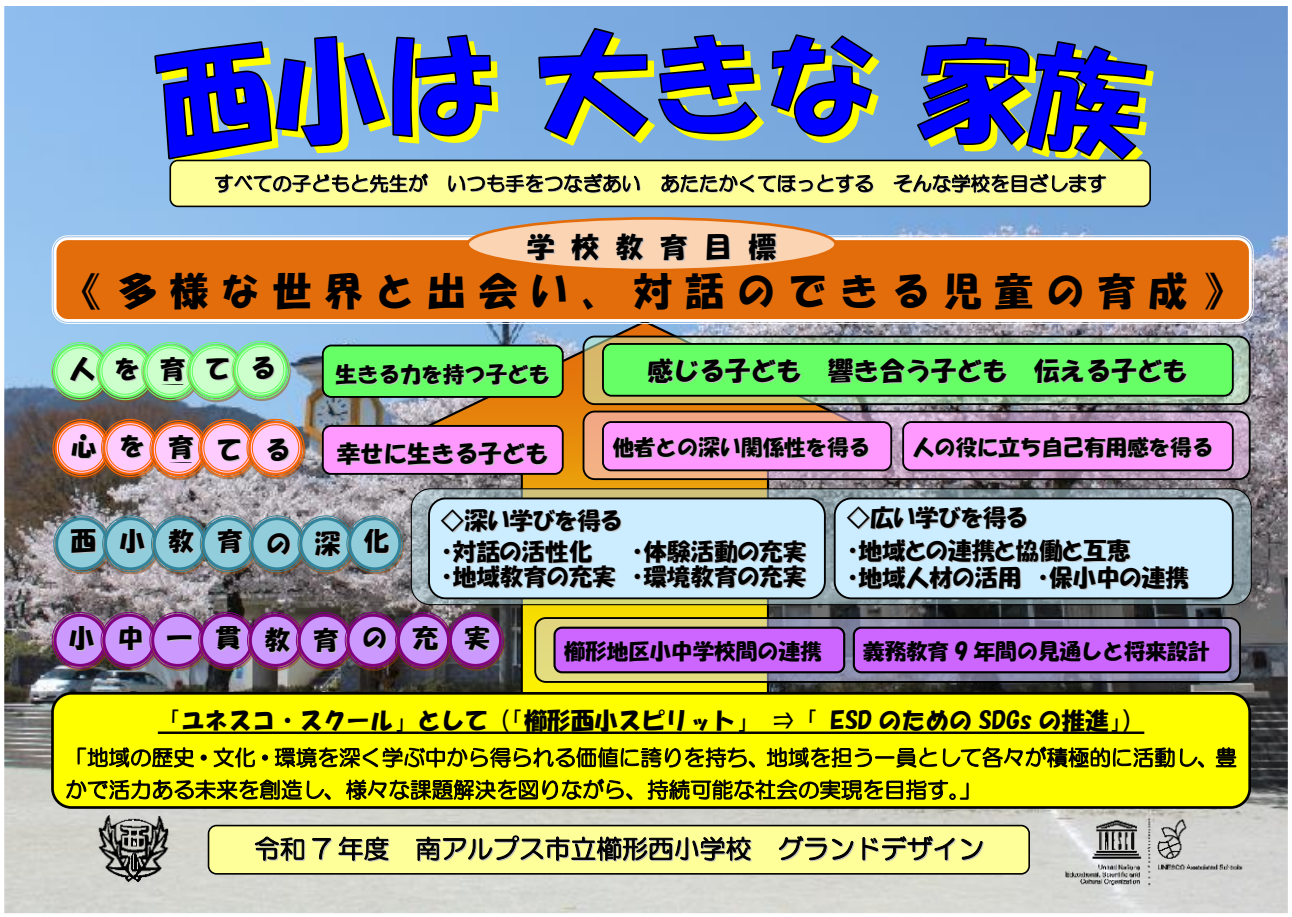
そして、これまでの西小の実践を振り返ると，この ESD と SDGs に取り組んできたことで、西小の子どもたちが６年間で，明るく素直に、心豊かで積極的な姿に成長していることが誰の目にも明らかだからである。そこで，

『ESD と SDGs を通して仲間意識と自己有用感を育て，その中から感じる，響き合う，伝える力を伸ばし，生きる力の向上に結びつける。この力こそが，多様な世界と出会い，対話のできる児童を育くむことにつながる。』

これが西小学校における教育の基本である。

※ESD　（Education for Sustainable Development）持続可能な開発のための教育
※SDGs（Sustainable Development Goals）持続可能な開発目標

（4）令和７年度グランドデザイン



（5）櫛形西小のユネスコ・スクールとして求められていること

『ESD のための SDGs の推進』（2015 年２月 19 日認定　ユネスコ・スクール　別紙　）

「地域の歴史・文化・環境を深く学ぶ中から得られる価値に誇りを持ち，地域を担う一員として各々が積極的に活動し，豊かで活力ある未来を創造し，様々な課題解決を図りながら，持続可能な社会の実現を目指す。」

◇ESD（持続可能な開発のための開発のための教育）・・・方法
◇SDGs　（持続可能な開発目標＝17 の国際目標）・・・・目標

（6）櫛形西小のユネスコ・スクールとしての教師・学校の役割とは

①学校の内外で，教育と実際の活動を横並びに結びつけることであり
②そのための体験的活動であり歴史教育であり環境教育であり
③それを創るための学校と教師でなくてはならない

※この学びから得られた力（心）こそが，多様な世界で強く生き抜く力（強くしなやかな心）となり，子どもたちの来を切り拓くための道標となるであろう。

（7）小さな学校ゆえにできること

①子どもと教師と地域と家庭のつながりを大切にします（西小学校は大きな家族）。
②子どもと子どものつながりを大切にします（異年齢とのつながりが西小教育の特色）。
③顔が見える教育を行います（すべての子どもの顔をすべての教師がわかる学校）。
④様々な地域の力を学校教育に生かします（家庭・地域との連携・協力のさらなる推進）。

（8）歩み続ける教師，そして学校であるために

①子どもの姿から学ぶ教師を目指します（良さを認め，励まし，共に成長する教師）。
②常に自分を振り返り見つめる教師を目指します（より良く変わり続ける教師）。
③学び続ける教師を目指します（「一生勉強」を座右の銘とする教師）。
④子どものための学校を目ざします（何のための教育なのかを問い続ける学校）。
⑤地域から愛される学校を目ざします（地域コミュニティの中心となる学校）。

（9）具体的取り組み内容

①これまでの「体験活動」「地域教育」「歴史教育」「環境教育」を継続して行い，必要に応じてさらなる地域人材の活用，関係機関との連携を深めていく（チーム学校としての取組み）。その際に，学んだことの成果と課題を考えさせ，「成果はより伸ばす方法」，「課題は解決の方法」を子どもたち自身に考えさせるよう取り組む。⇒ESD 教育のための SDGs

②様々な学習に「協働」「協同」「学び合い」の場を取り入れ，他者との関係性の中で「感じる子ども」「響き合う子ども」を育む。⇒ここから互いに手を取り合う仲間意識や，認められることによる自己有用感が生まれる。

※注・・「学び合い」は「教え合い」「話し合い」ではない。課題解決の場面で，必然的に生まれる他者との係わりであり，それぞれが主体的に係わる活動である。上から下への「教え合い」，わかってることを話す「話し合い」と区別しなければならない。

③学校内外での学習活動を含めた日常生活のあらゆる場面で，またあらゆる人に対して，自分の考えを表現する場，練り上げたり再考したりする場，人の考えを参考にする場を設け，誰とでも分け隔てなく対話できる子どもを育む。⇒場所が変わり，人が変わっても対話できる子どもを育む。

☆何か全く新しいことに取り組むのではない。これまで連綿と引き継がれてきた西小の教育を，ESD や SDGs の視点で見直し，そのエッセンス（未来を志向する課題解決の場）を取り入れるのである。その際に，取り組みの場面において，これまで研究してきた「協働」「協同」「学び合い」を仕組み，多くの人との関係性の中から，幸せに生きる子ども，生きる力を持つ子ども，ひいては，多様な世界と出会い，対話の出来る子どもを育むのである。

（１０）アクティブ・ラーニングの重要性

これまでの永年の学校教育は，領域固有の知識や技能，学習指導要領で言うところの「内容」の習得を最優先の課題として進められてきた。そしてこのことで思考力や判断力も養われ，あらゆる社会事象に対応できる能力の礎が身に着くと考えられてきた。

しかし，心理学者のデイビッド・マクラレンド（アメリカ）は，領域固有知識の所有や基本的理解を問う伝統的な学力テスト，学校の成績や資格証明書の類が，およそ職務上の業績や人生における成功にかならずしもつながらないことを，多数の事実を挙げて論証した。マクラレンドによると，より**大きな影響力を示したのは意欲や感情の自己調整力，肯定的な自己概念や自己信頼などの情意的な資質・能力であり，対人関係調整能力やコミュニケーション能力などの社会スキルであった**。これらの，いわゆる非認知的能力の重要性は，大好きなおやつを一時的に先送りできるかどうかという 4 歳時点での自制心の高さが，大学進学適性検査（SAT）のスコアから成人後の身体的・精神的健康状態までをも予測するというウォルター・ミシェル（ドイツ）の研究などによって，今や世界中に広く認識されるところとなった。（マシュマロ実験 or マシュマロ・テスト）

もちろん知識の習得は必要であるが，それは活用の効く知識として習得される必要があり，それ以上に，一生涯にわたる問題解決の行使に必要な資質・能力である，思考力・判断力・表現力などの汎用的認知スキル，感情の自己調整能力や社会スキルといった非認知的能力の獲得が優先されなければならないし，目指されなければならない。

しかも，近年の研究によると，感情の自己調整能力や社会スキルは生得的に運命づけられた不変な人格特性ではなく，組織的・計画的な教育によって十分に育成・修正が可能であり，むしろ適切な教育による効果が大きいと言われている。

ここに教育の必要性があり，そしてアクティブ・ラーニングの重要性がある。

一方，これまでの内容中心の教育から，資質・能力中心の教育への質的変換は，永年に渡り内容教育を行ってきた教師にとっては，痛みを伴う変換である。信じてきた自分自身の教育実践を，抜本的に変えることになるからである。チョーク・アンド・トークを封印する強い決意が必要だからである。

しかし我々は教育のプロフェッショナルとして，この大きな変化の波を吸収し，子どもたちの未来，ひいては社会全体の未来のために，主体的で対話的なアプローチにより深い学びをもたらすアクティブ・ラーニングに粘り強く取り組むことが，課せられた重要な使命であると強く自覚しなければならない。

（１１）小中一貫教育の充実

櫛形地区小中学校では、令和元年度に「小中一貫教育研究会」を立ち上げ、地区内小中学校（中１校、小４校）で研究を進め、令和４年度より本実施となった。教育課程を可能な限り接続させ、名実ともに小中一貫となるよう、今後も研究を進めていくことが重要である。教師の努力によって、実りある小中一貫教育となることを期待している。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
世界を変えるための17の目標
1 貧困をなくそう
2 飢餓をゼロに
3 すべての人に健康と福祉を
4 質の高い教育をみんなに
5 ジェンダー平等を実現しよう
6 安全な水とトイレを世界中に
7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに
8 働きがいも経済成長も
9 産業と技術革新の基盤をつくろう
10 人や国の不平等をなくそう
11 住み続けられるまちづくりを
12 つくる責任 つかう責任
13 気候変動に具体的な対策を
14 海の豊かさを守ろう
15 陸の豊かさも守ろう
16 平和と公正をすべての人に
17 パートナーシップで目標を達成しよう
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
2030年に向けて
世界が合意した
「持続可能な開発目標」です